

「いさば」

マグロに憑かれた男たち

田山準一

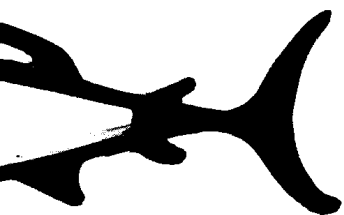
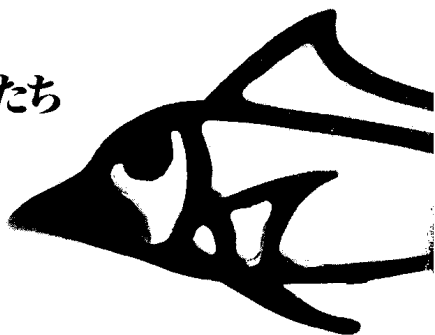


主婦の友社

「いさば」

マグロに憑かれた男たち

田山準一



主婦の友社

「いざば」マグロに憑かれた男たち

定価 一三〇〇円

昭和六十二年十月十四日 第一刷発行

著者 田山準一 〈検印省略〉

発行者 石川晴彦

発行所 株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一ノ九

郵便番号二〇一 振替 東京二八七五二七番

電話 (編集) 〇三一二九四一一二二九

(販売) 〇三一二九四一一二三三

印刷所 共同印刷株式会社

もし落丁、乱丁、その他不良の品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

©Junichi Tayama 1987 Printed in Japan
ISBN4-07-92465-2

▼プロローグ

小高い丘である。野芝、茅がや、浜ひるがおなど、背たけの低い野草でおおわれ、斜面は浜の岩場までつづく。頼朝が、うたげを催したという由来があつて、土地の人は、ここを歌舞島かぶしまと呼ぶ。頼朝が城ヶ島に遊ぶときは、漁業者が総出で舟の橋を渡したというから、当時の権勢がしのばれる。

青一色の海面が強い西風にあおられ、白い波がしらを立てる。相模湾である。手まえから海岸ぞいに油壺、鎌倉、江之島、小田原と並ぶ。三浦半島南端は、西暦九百五十年から六百年余のあいだ、鎌倉幕府を支えた東国武士の花、三浦党の根拠地だった。一時この地は、武田信玄の所領にもなっている。

城ヶ島は、港をへだてて目と鼻の先にある。島の灯台は北緯三十五度零七分五十四・四秒、東経百三十九度三十六分五十一・五秒に位置する。十五秒ごとに白閃光を放つ。明治三年九月、フランス人技師によって点灯されたが、さかのぼること延宝六年（一六七八）、つまり三百年以上も前から、船乗りの道しるべとして、かがり火が焚かれた。

島の外がわは一面の海原、太平洋である。水平線が弧を描く中ほどに、伊豆大島が浮く。左は東京湾をはさんで、房総半島が見える。

外洋から目を転じて島の裏手は、三崎漁港だ。遠洋漁船が数十隻、つないである。平坦ながらこの城ヶ島は、天然の防波堤として荒海から港を守る。対岸は冷蔵庫、加工場、市場、事務

所、などなど、コンクリートでかためた建築物が、押し合いへし合いところせましと並ぶ。山の中腹から頂にかけて、人家がびっしりと建つ。

三崎は帆船時代、風待ち港としての役割を果たした。が、鎌倉・徳川両幕府が関東にできたことよって、人口が急増した。なにはともあれ魚についての、旺盛な需要をまかなう商いが、この地を富ませた最強の理由である。需要がふえれば供給がわとしての商売が盛れる。三崎で海防のお役にはげんでいた下級武士三十人が、集団で漁業に職を転じた史実もある。鮮魚仲買業者も、中京・関西方面から続々この地に移住した。

利休ねずみの雨と歌った白秋によって、城ヶ島は一躍有名になり、ひきもきらず観光人が訪れた。当時、東京と三崎は、陸路が不便だったことから汽船で行き来した。白秋も牧水も、この地へ汽船で来ている。汽船は、三崎からマグロその他の魚を積んで東京に行く。帰りは避暑避寒の客を乗せて戻った。

白秋は大正二年、一家をあげて三崎に移り住んだ。白秋の父がこの地で、鮮魚仲買業を営むつもりだったという。九カ月の後に小笠原に去っているから、排他性の強いこの土地の水になじめなかったか。

地先で餌のイカが豊富に獲れ、しかも漁場がすぐそばだったから、マグロ漁船が三崎に集まるようになった。餌のイカを獲るのは地元の漁業者で、その餌を買ってマグロを釣るのは他国の漁業者だった。大正末期から昭和初期にかけて、近くは小田原、遠くは和歌山・徳島方面から、多くのマグロ漁業者と船員とが三崎に住み着いた。地つきの漁業者や、ひとあし先にこの

地に居ついて商売をしていた魚問屋、あるいは仲買業の人たちは、マグロ漁業者を新参あつかいにした。新参者が金を貯め、ぐんぐん羽ぶりをきかしてくると、先住民は斜にかまえる。おもしろくない。理屈はともかく、感情でものを考える。この地の魚問屋・仲買人と漁業者とのあいだに、何かこもったようなわだかまりが、なかったといえばうそになる。海と山とはさまれた、猫のひたいほどのせまい平地に、たくさんの人がひしめきうごめいているのだ。ひとにぎりの、小人数の、根っからの土地っ子は、あまり強い主張は打ち出さず波かぜ立てず、静かに日々を過ごしたがる。だが、時代をさかのぼって考証した場合の、地つきでない人は、先祖代々から進取の気性がある。儲けの多いこの土地に、積極的に居ついて財をなした。失敗して消えた者の多い出稼ぎ人の中の、かず少ない成功者たちだから、幸運の持ち主でもある。闘争心や縄張り意識もひと倍つよい。

三崎の漁業者は他港に先んじて南方マグロ漁場を開発した。戦後いちはやく漁船の大型化を実現した。大西洋に出漁した。超低温による品質保持を考案した。荒天高緯度のミナミマグロ漁場に挑んだのも、三崎船が先鞭をつけた。いずれも華々しい成果をあげたから、鼻息は、ことのほか荒い。問屋・仲買人のプライドは更に高い。三崎のマグロ漁業者は、俺たちの資本力と購買力があって、ここまで育ったのだと自負する。いずれにせよ、自分の儲けを削りそうな者に対しては、他業種であろうと、同業者ならなおさらのこと、激しくフアイトを燃やす。

私は今、土地がらと、業界人の性格づけをした。あなたが手にされているこのストーリーも、こういった背景のもとに進展して行く。

いさば 目次

プロローグ——1

第一章▼マグロの三崎、今はいずこ——7

第二章▼片目の、一徹な明治男がいた——17

第三章▼その若い衆は、よそ者だった——28

第四章▼冷凍マグロを見抜く動物的な勘——41

第五章▼男が惚れた男の立ち回り——57

第六章▼女も惚れる男の獅子奮迅——73

第七章▼三浦三崎に黒船が現われた——87

第八章▼相場師、丸共星が行く——102

第九章▼旋風のごとく天下盗り狙う——120

第十章▼三崎を震撼させた一船買い——132

第十一章▼新しい波に老いた獅子が立つ——150

第十二章▼時代に挑んだ鬼気迫るけもの道——173

終章▼巨星墜ち、風雲児は去った——195

エピローグ——219

写真 永嶋伸一郎

装丁 奥村春男（スパイスランド）

第一章▼マグロの三崎、今はいずこ

どしや降りの雨と風と碎け飛ぶ波のしぶきが、まるで窓ガラスを叩き破ろうとするかのよう
に息もつかせずぶち当たってくる。吹きっさらしの旅館は家鳴りがやまない。芽ぶきどきの夜
の嵐は凄まじかった。

ここは三浦半島の突端、三崎漁港である。

城ヶ島が、そと海の高波をさえぎり柔らげるため、たぐい稀な良港と人々はいう。

それにしてもこの時化だ。港の船はいずれも体をこわばらせ、もやい綱をしぼって岸壁にし
がみつく。

沖でこんな暴風雨をまともにくったら、えらい難儀を強いられる。だから船乗りたちは気象
にことのほか気をつかう。船員幹部の経験と勘を問われる場面もある。へたに針路をまちがえ
れば、命とりになるからだ。

夜半過ぎに、台風なみの低気圧は、どうにか通り過ぎた。

いくらか、うとうとしたらしい。

ふと目を覚まして外を見ると、ほんのり灰色に明けかけた地平線に、漆黒の城ヶ島が浮き上がっていた。

時計の針は、六時過ぎをさしていた。冬の夜明けは遅い。まだ暗かったが、濡れたガラス越しに光る街灯の下を、一人、二人と、人影がよぎる。もう三崎の町は動き始めようとしていた。

雨ガッパ姿の男が風にあおられ、パタパタと尻^しっぱしよりのようになって行く。闇から姿をあらわした女が、もうそんなに濡れることもないと気づいた様子で、傘をすぼめ、こんどは足早に走り去る。市場関係のどこかで働くパートタイマーだろうか。

以前は、もっと早くから、市場は動きはじめた。三時ごろになれば、荷揚げする何隻ものマグロ漁船のウインドガラスが、いつせいに鳴り出す。その生き生きとした騒がしさに、町の人たちは朝が来たことを察した。夜が明ける頃には、大量のマグロが並んでいたものだった。壮観だった。

入札は八時から始まる。売り買いは熱気に満ちていた。

いまはそうした市場の様子がすっかり変わった。六時ごろから市場はようやく動き出す。その物憂げな風景は眠気さえ誘う。

旅館の名は、岬陽館^{みそひがく}という。老舗だ。かつて北原白秋が常宿とし、雨にけぶる城ヶ島を、毎

日のように眺めていたという。

この宿に泊まったのは、ひとつには、なつかしい潮騒の音とかおりに、久しぶりにひたつてみたかったからだ。

わたしは昭和二十六年秋に水産大学の実習生として、三崎魚市場にはじめて来てそのまま就職、四十八年十月まで荷受の神奈川県鯉鮪漁業協同組合―通称「丸生」に勤めた。つまりわたしにとって三崎は、第二のふるさとなのである。

当時は連日の激しい勤めで、あたりの景色を愛でるゆとりなど全くなかった。そこで、かつてこの地に遊んだ白秋、牧水、鉄幹・晶子夫妻など、文人墨客の風雅にふれてみるか、という気になって、宿をとった。

だが、この荒々しい雨と風で、わたしの感傷はもののみごとに吹き飛ばされた。

わたしがよく眠れなかったのには、ほかにも理由があった。

翌日、ある男と会うという期待と興奮に、落ち着かなかったのである。

正確に言うなら、その男に会えるという確証はなかった。ただなんとしてでも会うぞと自分で勝手に決心して、前の晩から泊まりこんだのだ。

もう何度も電話を入れたのだが、どうしても本人が電話口に出ようとせず、いずれも男の女房が申しわけなさそうに断る、といったことの繰り返しだった。

ただその男の女房の板ばさみのような口ぶりから、なんとか本人に口を開かせたいという気持ちを探し、そのことに一縷の望みをつないだ。

男も、きつと語りたいことが山ほどあるに違いない。

しかも、聞けば、男は近々また日本を離れるつもりらしい。このチャンスのをがしたら、もう会えないだろう。

最後の電話で、本人が翌日の昼には家にいることを確かめたうえ、とにかくにも出向くからと半ば強引に伝え、宿をとった。

ほんとうに会えるだろうか。どうしても会うのが嫌なら、門前払いしてもらってもかまわないから、とも伝言しておいたが、嵐の間に、そのとおりになるかもしれないという悲観が頭をよぎる。そして夜が明けた。

時間は、まだたっぷりある。

朝食もそこそこに、宿から目と鼻の先にある、市場をのぞいてみることにした。

もう二十年近くたつから、薄汚れている。しかし四十三年に建った当時は、海に長く突き出たこの二階建ての建物は、三崎港自慢の近代設備を誇り、威風堂々としていたものだ。長さ約三百メートルの水揚げ岸壁には、大型マグロ船が同時に十数隻も接岸でき、競って水揚げされたマグロが、何千本と市場のたたきを埋め尽す毎日だった。

新市場ができたその年には、九万五千トンの水揚げを記録している。

この実績は新市場の威容とあわせて、名実ともに三崎が、焼津、清水など他港にぬきんでて、マグロ水揚げ日本一になったことを示す。三崎のマグロか、マグロの三崎かと、マグロ取引の代名詞のように、三崎港と三崎魚市場の名が全国に知れ渡り、主婦の井戸端会議にも話題にの

ぼるようになったのは、この頃からだ。

三崎の活況ぶりを見学する人の列があとを絶たなかった。その便宜を考え、二階の回廊が見学者に開放され、小中学生たちが、観光客が、そして全国の産地市場、消費市場の漁業者や魚商関係者らが、折り重なるようにして入札風景を見おろした。

魚市場に働く者たちに、見学者の視線を意識する余裕など、さらさらなかった。階下には威勢のよい荷受にうけや仲買の男たちが、てんでに手かぎを振り回し、怒声が飛び交い、日がな殺氣立っていたものだった。

その中に、目立つ男が一人いた。

背丈が百六十センチあるかなしのだが、堅太りで精悍そのもの、闘犬のような男だった。

その男は、周りの物も人も何もかも、なぎ倒し吞みつくす、さかまく激流のような渦を、いつも作って動いていた。やがて男は、日本のマグロ流通を、根こそぎ変える風雲児となる。

男の仕事はマグロの仲買人だった。その名は吉崎博ひろむね。ふつう魚商は屋号で言うならわしで、人は男を「丸共星まるきようぼし」と呼んだ。丸共星の一举手一投足が、マグロの相場をばげしく上下に動かした。いやがうえにも、丸共星の名が業界にとどろいた——そんな時代があった。

昭和五十年二月、わたしは三崎を去った。さらにその数年後、丸共星も三崎から消えた。

しばしの思いから醒めてみると、寒冷前線の名残りのつめたい風が、岸壁から市場を勢いよく縦に吹き抜け、さむさが身にしみ入る。

いや、風のせいばかりではない。目の前の光景が寒々としていて、どうにも信じられない。だだっ広いコンクリートのたたきばかりが目について、マグロが見当たらない。

奥の入札台の周囲に、三、四十人の男たちが、たむろしていた。近づくと、彼らの足元に、マグロが横になっている。せいぜい四、五十キロあるかなしかのメバチマグロだが、百本も並んでいない。

昔は一面マグロだらけだった。中には一本四百キロもの大きな白カジキもまざっていたりして、たたきが見えないほどだった。同じ一階にいて横から眺める者の目には、働く数百人の仲買人らが、マグロの原を忍者まがいに飛びはねているように見えたものだ。

岸壁には二隻の船が横づけになっていた。船底から数本の冷凍マグロが吊り上がり、岸壁におりる。それを手かぎで引っかけ、秤に乗せて検貫する。量り終わると目方を表示した紙を貼って、たたきに並べる。その仕事をするのが荷受の男たちだが、水揚げされるマグロの数より人間が多いのではないかと錯覚するほど、手持ちぶさたな仕事ぶりだ。

取引形態が変わったとはいえ、昔日の盛況を思い浮かべ、今のこの落ち込みようをまのあたりにして、わたしはいたたまれなかった。現場を離れて二階の市場管理事務所に行き、資料を見せてもらった。

昨年、昭和六十一年の実績数字で、水揚げ量は六万六千トンだという。ということは、四年のピーク時にくらべて約七割に減っている。焼津や清水の産地市場を下回って、ナンバー3ということになる。

もう三崎は、日本のマグロ取引を代表する市場ではなくなった。もちろん三崎はマグロでもっているのだが、少なくとも「マグロの三崎」と胸を張って言うのには、口はばかれるようになったのではないか。

閑散とした市場を見て、肌で感じとったつもりではあったが、数字を見て再び驚く。追われるように一階におり、急ぎ足で、わたしは市場を離れた。

もういいだろう。男の家は、町なかをはずれて、山あいに入り込んだところにあるらしい。バスで六つ目の停留所を降りると、大根畑が連なる中に、何軒かずつ建売住宅のような家が固まっている。

往時、リンカーンを乗り回していたほどの男だ。それも横浜ナンバーの一番だった。そのままだったら、さぞかし豪邸を建てていたことだろう。しかし、いまの家は、町なか離れた新興住宅地の、ささやかな一軒家だった。

玄關脇の呼び出しベルを鳴らした。すぐに人影があらわれ、戸をあける。一目で女房とわかった。いくらか気の弱そうな顔が、ますます戸惑って申しわけなさそうだったからだ。

悲観が的中したのかと思ひ、徒労感が頭をもたげかけた。

が、女房の口から、ほんとうに会いに来るといふのなら、家ではなく事務所で話をしたい、という男のことづてが飛び出してきた。ホッとする。

なんのことはない。事務所は市場のまん前だという。またトンボ返りだ。

道路を隔てて、市場に面する小さなビルの二階に、事務所はあった。階段を登りながら目に

した海は、もう風い^なでいた。空は、台風一過である。海辺の昼どきはまぶしい。

ところが事務所のドアの前に立つと、中が薄暗い。誰もいないのだろうか。不審に思ったが、試しにノックしてみた。

間をおいて「ハイ」と、こもったような返事が聞こえた。

ドアが開くのかと待ったが、そうではなかった。ノブを握って、ちよつとためらった。きつと尾羽打ち枯らしているであろう男を見るに忍びなく、そのまま帰ろうかと一瞬思ったが、そつとドアを押した。

暗い。外が明るいだけに、なおさらだ。奥のすみにあるテレビのブラウン管だけが、チラチラ光っていた。白黒テレビと見まがうほどに、色があせていた。十四インチほどの小さな画面だ。

数秒すると目が馴れた。五坪ていどの空間に、中古の事務机が二脚あり、ほかに目につくものはない。がらんとしている。窓ぎわにくすんだ応接セットがあつて、男はそのソファにすわっていた。

ぎごちない挨拶を交わしたあとは、どうにも間がもてず、いそぎ土産の一升びんを差し出した。男が高知の出身だと前に聞いていたので、酒屋で選んで、銘酒「土佐鶴」を買ってきたのだ。

「いやあ、これはどうも」吉崎博が瓶をおいた低い小さなテーブルをはさんで、やつと向かい合う。